
ジョーカー

焔の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカー

【Nコード】

N8310Y

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

夜、それは幻想的でミステリアスで恐怖を煽る時間。

冥界、それは罪を犯した魂を浄化する場所。

天界、それは浄化された魂を人間界に新たな命として送り込む場所。

そして、7つの罪、それは人間の心に必ず存在する大罪。

少年達は、覚悟を決め、その罪と立ち向かう。

序章の序章

ねえ、君は冥界と天界を知っているかい？
僕の推測でもいいなら聞いてくれるかい？
ははっ、そんな嫌な顔しないでよ。

僕が思うに冥界で自分の罪を払拭し、そして、浄化した魂を天界に送る、

そして、綺麗な魂を天界が人間界に新たな命として送る。

だけどさ、よく考えてごらん？

とっても重い罪を犯した人間は、簡単に浄化できると思ukai？
もしかしたら、そんな魂は冥界に一生束縛されてるかもしれないよ？

そして、天界の住人や冥界の住人が、ホントに冥界や天界だけにいるかな？

もしかしたら人間界に遊びに来ているかもしれないよ？
だけど、そうじゃないかもしれない。
その眼で耳で、見た聞いたことが真実だ。

そして、天界が作った、空気や水、炎や風、もし、これらを操れる鍵が天界に
存在するとしよう、そして、それを地上にいる天界の住人がもって
いたら？

その能力を開花させてもらってもし風や炎を操れるとしたら？

魅力的じゃないか？

あれ？この手の話には飽きちゃった？
なら、別の話をしよう。

いいから、そんな嫌な顔しないでくれ。

君たちはさ、夜をどう思う？

怖い？綺麗？ミステリアス？幻想的？

もし冥界の住人が夜を好むとしたら？

そして、冥界が定める7つの罪、もしそれが

人間界に逃げ出したら？

昼間が苦手だったら？

僕はね、夜が大好きだ。

闇にまぎれて、月夜が綺麗な・・・そんな夜が僕は大好きだ。

え？お前の好みは聞いてないって？

アハハ、まあいいじゃないか、昼間と夜、それぞれ、同じ場所でも別の場所のように見える、まるで異世界のように・・・ね？

でもさ、月夜が綺麗なときは、つきに見惚れちゃうだろ？

それと同じ気持ちだよ、僕もそういう月夜が大好きなんだ。

さあ、幕開けだよ？

天界と冥界、裏と表、昼間と夜

人知れず戦い続ける者の覚悟とその生き様、その日常を
その物語のね・・・。

序章の序章（後書き）

さてと、初めて完全なオリジナルを書きます！

今回は超、邪気眼な要素が入ってるかもしれないけど・・

まあお楽しみください！！

登場人物紹介

蒼神 あおがみ きょう 恭 能力 不死身<アンデット>

お気楽、能気な性格、焦ることはあまりない。
クラスからはヘラヘラしているバカと認識されているが
本人はあまり関心がない。

ひょんなことから冥界の『生』をつかさどる者、瑠璃を助け
一度命を失う、そして、彼女の『鍵』により
決して死なない不死の能力『不死身<アンデット>』を得る。
そして、それと引き換えに7つの大罪と戦うことを決める。

咲神 さきがみ ひろき 拓樹 能力 音<サウンド>

笑顔を絶やすことのない心優しい少年

蒼神、緋崎、空風とは高校入学からの友人

蒼神が戦っているところに巻き込まれ、

その場に居た天界の住人に『鍵』を

受け取るか否か、戦うか戦わないかの選択を強いられる。

そして、蒼神が戦っている罪の形を見て、

その禍々しい姿が罪の形ということを知り、戦うことを覚悟する。

蒼神が呼ぶ愛称は<ロキ>

空風 そらかぜ かずき 和貴 能力 風<ウィンド>

蒼神、緋崎、咲神とは高校入学からの友人

極度の人見知りで蒼神たち以外には心を開いてない。

咲神たちと蒼神が戦っているところに遭遇、咲神達とともに
天界の住人から『鍵』とともに能力を得るかを強いられる、そして、
一人で逃げたくない、もう逃げない、その覚悟を胸に戦うことを決
意する。

緋崎ひさき 敦あつし 能力 炎くフレイム>

蒼神達とは高校入学してからの友人

咲神のボケによく突っ込みと称して頭を叩く

人見知りで特定の人間にしか心を開いていない

蒼神の戦いに遭遇してしまった緋崎達は、天界の住人から『鍵』を
開くか迷う、だが、その迷ってる間に人が死ぬと思い戦う道を選ぶ。

輪廻りんね 瑠璃るり 冥界の住人

『生』の鍵をつかさどる冥界の重役の一人

人間界に逃げた7つの大罪を追いかけている途中

不意にその大罪の呼び出した怨霊に襲われるところを
蒼神に助けられる。

そこで、蒼神を助けるために『生』の『鍵』を開き

彼に不死身くアンデット>を与える、そして、

彼に戦いの道を示す、その後は蒼神の家に同居し

彼とともに過ごす。

桜庭さくらば 桜やぐら 天界の住人

『風』『炎』『水』『音』の『鍵』をつかさどる。
蒼神と怨霊との戦いに偶然居合わせ、拓樹たちに
『鍵』を開けるかどうかをたずねる。
その後、拓樹の家に居候している。

須藤すどう
唯ゆい

普通の学生、自称『蒼神の一番の理解者』
蒼神たちと同じクラス。

西条 あずね（さいじょう あずね）

唯と親友、拓樹のことに好意を抱いている。

相場あいば
恵めぐみ

一般の学生、唯、あずねと親友、靈感がとても強く
幽霊などが見える。

鍵くかぎ

天界と冥界、それぞれが持つ。
天界は『炎』や『水』といった現代にある物質を秘めた『鍵』を持ち

その鍵を開いたとき、その鍵に秘められた力が開花され、能力を得る。

冥界は『死』や『恐怖』といった、負の表現を秘めた『鍵』、それが開かれても能力に目覚めることはない。

瑠璃、が持っていた『生』の鍵は極めて異例に蒼神と同調し、彼に不死身の能力を与える。

7つの大罪

嫉妬

人間の幸せや幸福を妬み、それが原因で罪を犯したものの魂の集合体
好戦的で残虐、人殺しをゲームのように楽しむ。

嫉妬の送り出す怨霊は誰かに嫉妬しながら死んでいった者の魂。

色欲

人間の色気、主に女性が多い罪、あまり戦いは好まず
彼女の送り出す怨霊は美しさを求めすぎたあまり
その姿は禍々しい。

強欲

何かを求めすぎて全て崩壊したものの魂の集合体

完全にこの世のもの全てを自分のものにしたがる。
彼の送り出す怨霊は何かを求める傾向にある。

暴食

全てを喰らい尽くそうとして崩壊していった魂の集合体
なんでも食べる傾向があり、そのせいか
彼が送り出す怨霊は何かを食べて食べて食べまくる。

怠惰

なんでもかんでもめんどくさがる、だが、その罪の大きさは膨大で
彼が送り出す怨霊はその怨念がとても濃い。

憤怒

怒り狂った魂の集合体
裏切られたりさげすまれたものの魂が彼の元
それが故に彼が送り出す怨霊は7つの大罪で一番強い、
怨念が濃すぎるためパワー、スピードがとても強化されている。

傲慢

なんでもできるといつて破滅していった魂の集合体
その傲慢さが原因となったのにも気付かないほどだ。
彼の送り出す怨霊はスピード重視で、何か早いものに取り付く傾向がある。

怨霊

7つの大罪が送り出す罪に汚れた魂

彼らは物体に取り付き怨念を具現化させて人を襲う。

だが、活動できるのは夜、日が落ちている時間帯

なので昼間は取り付いたものの中に存在している。

人に取り付く場合はその人間を殺さないといけない。

そして、一度に二つに取り付くことは出来ない。

片方に取り付けば捨てたほうには取り付けない。

怨念が濃ければ濃いほど力を増す。

第1扉 不死身

俺の名前は蒼神 恭、特技は体力自慢、趣味はゲーム
そして、特徴は、絶対に死なない。

こんな自己紹介をする高校一年生がいるであろうか・・・。
だけどさあ、マジなんだよな・・・。

俺、死ねないんだよ。

正確に言えば死ぬことがない、もう死んでるし。
ギャグ的に言い換えるとゾンビってやつ？

だけどねえ、太陽の前に出ると焼く5秒で干物になっちゃうんだよ。
もともと冥界つてのは天界とは真逆の存在、天界の作り出した
太陽が冥界にとって弱点であることに変わりはない。

で、なんでこんな話をしているかというと、俺、その冥界の力で
ゾンビになってるのね・・・天界の太陽が苦手なんだよ。

で、そんな俺、現在授業中。

今は英語をやっているがチンプンカンプンだぜ・・・留年したくね
えな。

<きーんこーんかーんこーん・・・>

授業終了のチャイムが鳴り、それぞれ帰宅の準備を始める。
俺も帰宅の準備をして帰ろうとした、そのとき。

「おーい、蒼神帰るのか？なら一緒に帰ろうぜ」

と、とても元気のいい声がした。

振り向くとそこには俺の悪友にして入学してからの友人
咲神 拓樹がいた、愛称は『ロキ』なんであって言われると
「ヒロキ」だから「ロキ」これでもう何ヶ月も通っているの
でクラスのみんなは俺がロキと呼んだら咲神だとわかる。

「わりい、今日はチョット用事があるんだ、また明日な」

俺はそういつて学校を出る、時刻は6時、もう11月後半で
冬場なのでこの時間は課外授業が終わってからなら日は落ちて
いる。

そして、断りをちゃんと入れてから俺は学校を出た。

俺には不死身っていう隠れた能力がある、そして、当然そんな奴が
普通の学校生活を楽しんでると思うか？
ないってことさ。

俺のもう一つの姿・・・。

「はははっ、今日の奴もとっても禍々しいねえ」

現在時刻9時23分、場所は人気のない住宅街

そこで俺は、ある女の子とともに、あるものと戦っていた・・・。

その姿は犬が変形した感じであり。

大きなその体の顔は人、人間の顔がすこし犬の顔に混ざったような
・・・。

そして、その口はアゴと胴体部にある。

爪と牙も鋭く、普通の人間なら瞬殺だろうな・・・。

「今回は『色欲』か・・・ホントに禍々しいぜ」

俺はぼそりと呟いて一気に駆け出す

その爪が俺の腕を引き裂く、俺に痛みはない、そして、俺はちぎれた腕を

もう片方で持ち、それを投げつける。

うではそいつの頭に当たってそいつは後ろに下がる。

俺はころがった腕を元の位置に戻して傷を治す。

2〜3秒後には元に戻った腕を俺は軽く振り回し、起き上がったそいつを見る。

「なあ、瑠璃、こいつの魂も浄化できるのかな？」

「たぶん・・・でも、気をつけて」

「りょーかい」

俺はにやりと笑って右腕に力を溜める

「必殺！火事場の馬鹿力、改めて不死身の馬鹿力！！」

俺はいつきに飛び込み右腕を振り上げる。

――人間ってさ、すごいピンチになったとき力が格段に上がる
じゃなか？

でもそれってさ、それって脳みそが力をセーブしていてその鍵を外
した状態なんだって。

普通の肉体じゃ耐えられないからセーブしているとか・・・。

で、俺は不死身、体が崩壊してもすぐに直るってわけ。

だから火事場の馬鹿力・・・というよりは、ただのバ怪力を

惜しみなく発動できるのさ。――

俺の右腕はそいつの頭を砕いた

赤い血飛沫が脳漿とともに俺に降り注ぐ。

そして、元の犬の姿になったその死体からは赤い人魂が現れた。

「さあてと、色欲、この魂は俺が浄化してやる」

俺はそういつて右手を掲げる、赤い魂その右腕に吸収された。

<ドクン>と、俺の中に何かが入り込んだ感覚がした。

これで132個目。

「さて、仕事もおわったんだ、帰ろうぜ」

俺はそういつて輪廻 瑠璃にむかって手を差し出す。

瑠璃はその手を握り、静かに微笑む。

さて、今倒したのが俺のもう一つの顔

怨霊を倒してその罪の魂を吸収し、浄化する。

そして、最終目的はその怨霊を生み出しているものを・・・
7つの罪をぶったおすこと。

人間の7つの大罪、嫉妬、強欲、色欲、暴食、憤怒、傲慢、怠惰
冥界から逃げ出したこいつ等の鍵を破壊、または奪い冥界に戻す
これが俺の不死身と一緒に与えられた使命。

「にしても、最近は色欲出てこなかったのにな」
俺は瑠璃に呟く

「うん、でも色欲が出たって事は残りの罪も動き出しているんじゃない？」

「だろうな・・・でもまっ、やるしかないっしょ」

俺達はそう話しながら家に着いた
先ほど倒した怨霊は色欲が生み出したもの
美しさを追求するあまり禍々しい形になった罪の姿・・・

「さーてとお、天界の住人方もいい加減に『鍵』の能力を開花させる人間、

探しに来てるんじゃないですか？」

俺はヘラヘラしながら何気なく呟いた
その瞬間、チャリン、と、何か鍵の束を落した音が聞こえた

「ん？」

俺は自宅目の前で振り返ると、長い黒髪の美少女さんが口をアワアワさせながら
硬直している、そして。

「あ・・・あなた、冥界の能力者！？
いきなり指差され叫ばれる。

「はあ？」

俺は気の抜けた返事をした。

時刻は夜中の11時、自宅のリビングにて・・・
天界の鍵の守護者さんが目の前で正座をしていた。

「まさかホントに来るなんてな・・・」
俺は啞然としながら呟いた。
すると、天界の住人は話し始めた
名前は桜庭 桜 というらしい。

そして、桜は何かを考えてから話し始めた。

「いえ、私はまだ遅いほうです、もうすでに何人もの『鍵』の守護者が

その力を開花させる人間を探してます」

「ああ〜だろうなあ、もともと7つの罪を追いかけるのは天界が行うって

この前瑠璃に聞いたことがある」

俺は視線を瑠璃に移す。

瑠璃はなにやら考えているようだ。

「それで、私の『鍵』は音、風、炎、水、中でも私の本来の力は音です、それで・・・誰かいい人材はいませんか？」

「俺は派遣会社か！」

俺は一言突っ込み

桜は少し考えて

「でも私の周りの天界の人たちみんな鍵を開花する人間見つけてるんですよ」

「周り探せば見つかるはずだ、どっか探してろ」

そういつて家からつまみ出す

「え！？ちよっ！ちよっとお〜」

なにやら涙声になっているようだ

まあいいか、無視しよう・・・

すると、声は収まり桜はいなくなっていた

「ふう、帰ってくれたか・・・」

俺は一息ついて布団にもぐる

そして、いつしか眠りについていた・・・。

そして、軽くちよつと前のことを思い出す

俺が初めて瑠璃とあった日、そして、初めて味わった
死の感覚・・・。

俺は頭を軽く横に振り、まぶたを閉じる。

俺がこの不死身的能力を得た理由は・・・
また今度はなすことにするよ。

第1扉 不死身（後書き）

さてと・・・期末はあさって・・・

ふはははは！現実逃避最高！！

って自暴自棄に落ちちゃう俺ですはい、ごめんなさい。

っと、どうでしたかな？

オリジナルだから更新速度が普通より遅いんですけどねww
まあ頑張ります！

第2扉 始まりの夜

人間なんて、自分の事しか考えてない。

他人を平気で傷付けたり、裏切ったり、あげく自分の罪を人になすりつけ

『僕、私は知りません』だ・・・。

そんな人間が俺は大嫌いだ。

だけど、そうじゃない奴もいる。自分の罪を償い、

そして二度とそんな罪は犯さないと誓う。

そんな人間は嫌いじゃない。

だから、俺の目標は『人のために動ける人間になる』だ。

たとえそれが偽善でもかまわない、誰かが笑顔でいるなら・・・。

だけど、心の中で不幸な人間をほくそ笑んでいたら？

俺は自分が嫌いになるだろう。

学校の帰り道、ボーっと公園のブランコに座って考え込んでいた。
最近よくあるな・・・ボーっとすること・・・。

今いる場所は人気が少ない公園、時刻は9時半

2時間以上ボーっとしていたのか・・・。

俺はふと周りを見た。ただでさえ人気が少ないのでこの時間は誰も通っていない。

「つま、当たり前か」

俺はひとり呟き公園を出た、そのときふと、何かが眼に止まった
それは黒い影のようなもの、そして、そいつの右手と思われる部位に

なにか鋭利なものを持っていた。

そして、何より驚いたのはその先には俺と同年くらいの女の子が何も気付かないまま歩いている！

俺は彼女の元へ走った。

黒い影が鋭利な刃物を振り上げたのだ。

「きみ！危ない！！」

俺はそうさけんで黒い影と彼女の間に入った。そして・・・。

<スパア・・・>

黒い影は俺の体を斜めに切った。

俺の体から赤い液体が飛び散る・・・。

それが俺の血だと分かった瞬間、体に痛みが走った。

痛い、痛いイタイイタイ！！！！

体から血が止まらない、俺・・・死ぬのか？

俺は薄れ行く意識の中、助けた女の子を見た。

彼女はとても驚いた様子で俺を見ていた。

俺は力を振り絞り

「に・・・げて・・・よ・・・」

そして、それを最後に、俺の意識が途絶えた。

・・・。。。。あれ？ここ・・・どこ？

俺は気がつくと真っ黒な空間にいた

体には奇妙な浮遊感がある・・・

俺・・・死んだのか、ってことは天国？地獄？

ああ、もうちょつと生きていたかったなあ・・・
あの子、逃げ切れたかな？

そう思うと、体がうずきだした

「クソ！おきろよ！俺の体！俺は・・・」

俺は目標を達成した、人のために死んだ
なのになんだ？この違和感は・・・

「俺はまだ！！」

これで満足だったのか・・・

「俺はまだ・・・こんなところで・・・」

いや、俺が目標だったのはあくまで

「死んでられないんだよ！！」

ハッピーエンドを俺自身がこの目で見えるまでは・・・

「俺の運命を・・・あんな影野郎に決められてたまるか！！」

そう叫んだとき、俺の頭に声が聞こえた
『なら、その覚悟・・・試してみる？』

「ああ！？」

俺は頭の声に向かって叫んだ

「上等だぜ！生きてこの手で・・・俺自身の運命を勝ち取ってやる！」

俺は叫んだ、すると、いきなり目の前が光りだした

「っ！」

俺は目を伏せ、光が過ぎるのを待つ

光は一瞬で収まり、また暗い空間に戻る。

『とつて・・・』

頭の声がそういった、俺の目の前に鍵が浮いていた。

俺はそれを手に取った。

すると、丁度、胸のと真ん中が光りだした

見てみる、そこにあつたのは『鍵穴』・・・。

『さあ、鍵を鍵穴にさして・・・上手くいくかはわからないけど』

「どういうことだ？」

『私たちの『鍵』は開花するかわからない・・・でも、助かるにはこれしかない』

目の前が光だし、その中から俺が助けた女の子が姿を現した

「君は・・・いや、君が声の・・・？」

女の子はコクリと頷き

「さあ、鍵を開けてみて、ただ、この鍵を開けるのだったら・・・

「この先戦いがあるってことを忘れないで」

女の子はただジーンと俺の目を見ていた

「私の名前は輪廻　瑠璃・・・冥界の『生』の鍵の所持者」

そういつて俺に歩み寄る

「さあ、貴方はどうするの・・・？」

長い黒髪、美しくも何者も拒む赤い瞳
俺は、生きると決めた。

「俺は生きるぜ・・・死人になろうがなんだろうがな」

そして喉が裂けんばかりに叫んだ

「俺は蒼神　恭！覚えとけ！！」

そういつて鍵を胸の鍵穴に差込、回転させる。

くガチャリ>と、鍵が回り、体の中に何かが生まれる感覚が出た

瑠璃は眼を見開き

「適合した・・・？冥界の鍵が・・・？」

そうなにやら呟いて

やがてハッと、俺に向き直る

「合格のようね・・・なら行きましょう、彼らが待ってるわ」

そういつて俺の手をつかんだ・・・

「ん・・・くっ・・・」

俺は起き上がり、周りを見た

そこには瑠璃がいた、場所は俺が死んだところだ・・・
みると黒い影が手前に着ていた

「っちい！」

俺はとつさに腕で瑠璃を後ろで守るような体勢をとった

「瑠璃・・・アレが、彼ら？」

「そう・・・冥界から逃げ出した7つの罪、その罪が投げはなった
怨霊・・・あれは物陰に取り付いた怨霊、たぶんその罪は嫉妬」

「しつとねえ・・・確かに影でこそそそしそうだな」

俺は立ち上がり腕を鳴らして

「上等、ぶったおして浄化してやる」

そういつて初めて黒い影、世界では化け物と呼ばれるものと対峙した

黒い影は右手の影を先ほどと同様鋭い刃物にして切りかかる

俺はそのまま受け止めた、体に痛みはない、だが、胸にはちゃんと
黒い影の刃が刺さっている。

俺はその手をつかみ、拳を振り上げる。

「さあてと、罪の精算だ」

思いっきり影の首を殴り飛ばした。

<ミチリ>と、嫌な音を立てて赤い液体とともに
首が飛んだ。

そして、影を倒し、赤い魂が浮き上がった

「これは・・・？」

「これが、罪の魂・・・こいつはその罪を清算できずに消えていく・・・」

瑠璃はそういつて眼を伏せる

俺はその赤い魂を見て、何気ない一言を言った

「なあ、こいつ俺の体で浄化できる？」

「え？」

瑠璃は眼をぱちくりさせて聞き返す

「いや、だから俺の体でこいつの罪を浄化できるかなあって」

俺は赤い魂をそつと包み込んで胸に押し当てた

「つちよ！まって！」

瑠璃が止めに入ったが赤い魂は俺の体に吸い込まれるように消えた。その瞬間<ズグリ>と、俺の体に何かが入り込んだ感覚がした。

「さっきの魂・・・くそがあ、暴れんじゃねえ！！」

俺は右手で自らの腹部を裂いた

「俺といつしよに罪を償おつて言っただ、汚れたまんまで終わろうとすんな！」

俺は中の魂に向かって叫んだ、そして、不意に頭に

『ありがとう』

と声がした。

そして、左目がうずきだした

「つく、こんどは・・・なんだよ・・・」

俺はうずく左目を振り払うように頭を振った
＜カチン＞と、左目が何かと合わさった気がした

「え・・・？」

瑠璃が眼を丸くして呟いた

ゴースト・アイ
「霊眼？」

鏡で見た俺の左目は赤く輝いていた・・・

あとで聞いた話だけど・・・
ゴースト・アイ
霊眼つてのは

体で浄化した怨霊を自分の力にする、きわめて珍しいケースらしい。

俺は瑠璃とともに7つの罪を倒すと、決めたのはそのときからだっ
た。

初めて怨霊を体に取り込んだとき流れてきた感覚
＜恐怖＞や＜絶望＞に満ちていた・・・。

それらを開放できるなら・・・。

それが俺と瑠璃の、初めて出合った夜だった。

第2扉 始まりの夜（後書き）

結構2話まで書いてたからよかったけど3話目からどうしよう（泣）

第3扉 俺の日常（昼）前編（前書き）

はい！なんか最近更新で着てないし

展開が速い！？って思ってるかも知んないけど・・・

そこはまあ勘弁しといてくださいな！

頑張って上達させていく（ついでに1話2話の編集もしておく）の
で！！

第3扉 俺の日常（昼）前編

俺の日常は・・・大体朝6時に始る

俺が起きて、瑠璃を起こして、着替えて、朝食をとって。

7時に家を出る。

7時半に学校に着く、俺は席に座り悪友を待ちながらゲームをする、瑠璃は俺のまん前で本を読んでいる。

7時40分、悪友こと咲神 拓樹 緋崎 敦 空風 和貴がきた。
そして、俺の日常は始った・・・。

「で？今日は何をするのかなあ？」

拓樹ことロキがいつものようにぼやく

すると、何かを思い出したように和貴ことカズが口を開く

「あれ？今日って確か転校生が来るって・・・」

「・・・転校生！？」

俺、ロキ、緋崎の声がかぶさった

転校生かあ、この時期に珍しいな・・・。

「でもさ、なんでカズちゃんがそんなことしてんの？」

俺は疑問をカズに問いかける

カズは表情を変えずに

「そこで、先生と見知らぬ女の子が話してたから、校章は1年生だ
っただけ

見ない顔だったし」

「なるほど・・・」
ヤッパリかぶる俺達3人

俺は、高校入学時にこいつ等に出会えてよかったなあと、今でも時々思う

カズちゃんは俺達以外にはあまり口を利かないし、緋崎もそれにしかり、

ロキはエロ発言バツカだけど周囲を和ませるオーラってのがある。

みんな俺にはないものを持っている・・・。
だから一緒にいるのかもな（笑）

そんなことを考えてると

<キー・・・インコーンカーンコーン>

「あつ」

「チャイムだ」

「先生だ」

上から緋崎、ロキ、俺、カズはちゃっかり席に戻っている
おのれ・・・と、心でのろいながら席に戻る

先生は教壇に立つと気持ちの悪いほど笑みを浮かべ

「今日は転校生さんを紹介します、さ、はいつてはいつて」

と、先生にそそのかされておずおずと入ってきたのは・・・。

「可愛いな」

と、俺が思わず呟いた、俺はそれに気がつき5秒で赤面

「城野 沙織（じょうの さおじ）です、よろしく願いします」

と、沙織は丁寧（ていねい）に頭を下げた、その姿はとても可愛らしく
髪は黒く肩まで伸ばしている、あまり大きくない眼鏡をかけていて
それもまた可愛く見える。

沙織は俺のほうを見て、何を思ったのかニコツ、と笑いかけた
俺は一瞬戸惑いながらも笑い返す。

その様子を後ろで見ていたカズは

「おいこら、テメもう眼をつけたのか？変態め」

「しょっぱなで罵倒されるほど変なことは考えてなどいない」

と、小声のやり取りをした・・・。

HRも終わり、俺はいつものように窓側のロキのところに行こうと
したところで

突然声をかけられた。

「あの、蒼神くん・・・ですね？」

「はい？」

振り向くとそこには沙織がいた、ワザワザ名指して、何の用だろ
う・・・？

「えっと、よければ学校を案内してもらえると嬉しいんですけど・・・」
「」

上目遣いで見られたら断りづらい・・・
俺は周りの『なんでテメエが！』という男子の嫉妬の視線を頑張っ

て耐えながら

「えー……っと、何で俺？」

と、自分以外の人間にやらせようとした、だって……この視線痛いんだもん。

だが、沙織は10秒と立たずに

「蒼神くんがいいからです」

言い切った、言い切りやがった、後ろの嫉妬が殺意に変わった

いくら俺でも怨霊じゃない魂は浄化できません！！

幸い今は昼休み、まだまだ時間は……うん40分近くある

俺は沙織の手をつかみ

「それじゃ行こう！すぐ行こう！俺が殺されないうちに！！」

そついつて駆け出した。

教室から『おい！あいつの机はどこだ！？』『爆竹と画鋏を用意しろ！！』

『おい！推進エンジンを付けろ！！』と、とてつもなくえぐい言葉が並べられていたがとりあえず無視！怖いから……。

俺はこの後の俺の状態（ずったずたにされるであろう悲惨な光景）を思い浮かべながら

一通りの案内を終えて屋上に出た

「ここが最後、俺のお気に入りの場所、あんまし人いないからさあ、俺はすこし笑いながら沙織に向き直る」

沙織は、こちらを凝視していた、なにかに取り付かれたかのように

「城野さん？」

俺は沙織の肩を軽く揺らす、するとハツとなって我に返った

「は、はひい！？」

声が裏返った沙織は俺を見て今度は赤面して

「え・・・えつと蒼神くん？」

「ん？どうした？」

沙織はすこしモジモジと指をもてあそびながら

「私のことは沙織でいいですよ？」

そついつてまた必殺上目遣いで俺を見た

「へ？・・・ど、どうして？」

いくら俺でも混乱する、初めて会った女の子に学校の案内を指名されて

あげく名前で呼んでくださいだとい！？

普通の男なら卒倒してるぞ！？

いや、俺も普通の男だけども、ん？不死身って普通の男に入るのかな？

などと考えてると沙織が口を開いた

「いえ、直感的に・・・その・・・名前で呼んでほしくて」

と、赤面で言うもんだから困ったものだ

いくらなんでも断りづらい、っていうか断ったら泣かれそうですらに怖い

と、言うわけで約30秒の悩みの末出した結論が

「わかったよ、さ、さあ、、、沙織・・・」

こっちまで赤面する、瑠璃の時は平気なのになあ・・・なんでだろう？
などと考えてるうちにチャイムが鳴った

「っあ、チャイムだよ、行こう？蒼神くん」

そういつて今度は俺が手を引かれる形となって、教室に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8310y/>

ジョーカー

2011年12月5日20時49分発行